

HAYASHIBARA MUSEUM OF ART NEWS

# 林原美術館

# NEWS

Vol.

8

平成16年10月1日

特別展

## 第二回 林原国際芸術祭・希望の星、 「五感で見る国際アート展」

平成16年10月10日(日)～10月31日(日)

林原国際芸術祭・希望の星は、障害をもちながらも、芸術の分野で世界的な活躍をしている人たちの活動を通して、世界の人々の心を結び、喜びを共有する活動として、昨年から始められました。第二回目に入りました今年は、視覚障害をもつ人の美術活動を紹介いたします。

日本・イギリス・ネパールの作家たちの立体作品面作品を展示します。小学生の作品から美術界で活躍している人の作品まで、多様な表現に驚かれるのではないかでしょう。また、一般的の美術と変わらないと感じられるかもしれません。今回の作品は、視覚中心の生活をしている現代の私たちにとって、「見る」ということをもう一度考えてみる良い機会となります。

なお、今回の展示作品の一部は、触れてみるとることができます。

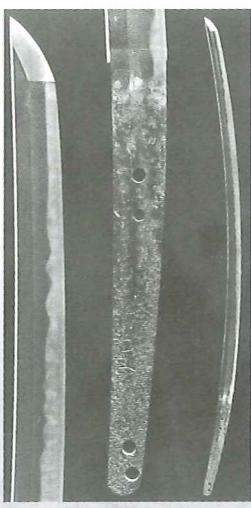


「無題」戸辺孝夫  
27.0×14.5×26.0cm 粘土・本焼  
(1974年)

企画展

## 「刀剣の美と心」 平成16年11月7日(日)～12月12日(日)

備前の地は平安時代後期から、日本刀の産地として長い歴史と伝統があります。特に鎌倉時代以降、多くの名刀・名工を輩出してきた、備前刀を中心いて展示します。加えて、当館所蔵の後藤家の刀装具や、明治期に活躍した正阿弥勝義の作品を展示します。日本の誇る工芸品の美をご堪能下さい。



重要文化財 太刀 銘 光忠

企画展

## 「瑞祥」

平成17年1月4日(火)～2月13日(日)

松竹梅や鶴亀といった縁起の良いものは、我々の心を癒し、華やいだ気持ちにしてくれます。絵画や蒔絵に描かれたこれらの吉祥図を見ていただき、新春を祝っていただきたいと思います。また今回は、国の重要文化財「綾杉地獅子牡丹蒔絵婚礼調度」の中から、貝合わせ七二枚全てを初展示します。ご期待下さい。



双鶴図 円山応挙筆

## 「陶磁器の美」

平成17年2月20日(日)～3月27日(日)

今回の焼物展では中国陶磁、朝鮮陶磁、日本陶磁を展示了します。唐三彩や青花に代表される中国陶磁、翡翠色の高麗青磁を中心とする朝鮮陶磁、優れた色絵の技術をほこる日本の鍋島焼など東アジア三国の陶磁器を一堂に展示し、比較鑑賞するとともに、日本、朝鮮、中国の歴史や文化の違いをさぐります。



青花唐草文大皿

# 「五感で見る国際アート展」 の作家たち

日本女子大学家政学部児童学科助教授

西村陽平

「イギリスでは、視覚障害の人も美術大学で学んでいますよ。」と聞いた時は驚いた。ジュリア・カセムさんが話された時のことだ。彼女は、ロイヤルカレッジ・オブ・アートのヘレン・ハミング・リサーチ・センターに勤めている。日本では、長年視覚障害者と美術について活動をしていた。「五感で見る国際アート展」では、イギリスの作家の作品を選んでいただいた。それらの作品は、視覚障害だから何か変わっているというより、現代美術の作品と変わらない印象をうけた。普通に美術大学で学んでいたのだから当然のことかもしれない。そういう点で、今回の展覧会に出品しているパドレイグ・ノートン君は、以前アイルランドから私のところに訪ねて来ることがあった。彼は国立のダブリン美術大学を卒業している。当時の作品は、粘土で大きな凸凹のあるレリーフであった。今回の作品は、大きく変わっていた。黄色や緑色の紙に木炭で描かれた風景は、19世紀のドイツ・ロマン派のカスパー・ル・ダーヴィト・フリードリヒや現代のゲルハルト・リヒターを思い出させた。

日本ではもちろん、視覚障害の人が美術大学に入学することはできない。私は、23年間千葉盲学校で美術を担当していたのだが、この問題もずっと気になっていた。盲学校では美術の授業はあるが、卒業してからも制作を続けたいと希望したとき、それはなかなか難しい。そこで、東京の六本木にあつた麻布美術工芸館で、見えない人も見える人も参加できる粘土のワーキシヨップを行っていた。このワーキシヨップに、京都から光島貴之さんが参加していた。彼は、これがきっかけで制作を始めるようになる。先天性眼内障で、小さいころはすこし見えていたが、10歳のとき失明した。ワーキシヨップでは8年間ほど粘土による造形を試みていたが、この間に紙テープによる触つてわかる「触覚絵画」という技法を知ることになり、今ではそれを主な表現手段として活動を続けている。

「触覚世界の面白さを、眼の見える人に伝えたい。そして見

たひとが様々な感想や解釈を返してくれるのも興味深く、それを自分の作品の中に活かしていきます。“見える世界”と“見えない世界”的やり取りを通じて、何か新しい世界を創りだしていきたいのです。」

と彼は語り、最近は美術館での展覧会も多いが、昨年はサンフランシスコのギャラリーでも個展を開き、発表の場を広げている。

戸辺孝夫君も全盲で、粘土の立体作品を出品している。私が盲学校に赴任した時、彼は理療科の卒業の年だった。彼は、卒業後も陶芸を続けたが、かなわなかった。それで、自宅で鍼灸業をいとなみながら、制作活動をしていた。

1980年頃、彼は次のように語っていた。

「見える人が街の画廊にラップに入れて絵を見るように、視覚障害者もどこでも簡単に触れればいいのですが。見える人が紙と鉛筆で落書きをするように、ぼくも粘土の落書きがしてみたいのです。」

「五感で見る国際アート展」には、ネパールからの出品もある。ネパールでは、視覚障害者だけではなく、障害をもつ人にとって大変厳しい状況にある。障害者は前世に犯した罪により、神に罰せられ障害者となつたという伝統的な偏見により、社会から隔離され、その結果として、教育を受ける権利を奪われ貧困においまれている。私は、ボランティアとしてネパールのカトマンズに

あるNGO身障者技術技能開発センターで、半年ほど教えたことがある。

この時制作された作品が、今回出品されている。視覚障害の人たちは、粘土による立体造形を行つたのだが、最初は粘土作りから始めた。センターの裏の田んぼから土を持ってきて、それを砕き、水を加え、練つて粘土を作る。

視覚障害の生徒は7人、みんな若いが、夫婦で参加している人もいる。彼らの子どもも一緒に粘土で遊んでいた。彼らは、以前何をしていたのか、そのうちの一人に聞いたことがある。



みんなで土を砕き、粘土を作る(身障者技術技能開発センター、カトマンズ)

と家出をしました。最初インドのダージリンに行き、それからデリーで過ごしました。そこで召使の仕事をしていましたが、13歳の時陽チフスに罹り、全盲になってしまいました。15歳の時、両親に会いに帰りました。父は既に亡くなっていました。母は、兄弟のもとを去り、再婚していました。再び私たち兄弟三人は、ストリートチルドレンになりました。ある日、レストラ

ンの前で物乞いをしていたら、イスラム人のツーリストに会いました。彼に今までのことを話したところ、彼は私たちが学校へ行くためのスポンサーになってくれました。今、私はクレイワークを学んでいます。妹は、3年生で学んでいます。弟は、良い声をしていますので歌手になればいいと思います。しかし、彼は、5ヶ月前に学校からいなくなり、その後どうなったのかは知りません。

他の人たちも、センターに来る前は、道端で駄菓子などの雑貨を売っていたり、厳しい生活をしていたようだ。

ある全盲の方が話されていた。

「私は、闇の中にはいるのではない。光と闇のコントラストのない世界にいるのだ。」

見ることは信じることだと思い込んでいた者にとっては、思ひがけないことばである。三つの国の作家たちが示す作品から、「見る」ということをもう一度考えてみる良い機会となる。

林原美術館の名品から

## 本阿弥光悦の書「徒然草」

(財)林原美術館 館長 熊倉功夫

寛永年間(一六二四—一四三)を前後する十七世紀前半の文化を「寛永文化」と呼んでいます。

寛永文化のなかに、日本の芸術史上に名を残すたくさんの人びとがあらわれた。またすばらしい作品が残った。たとえば庭園と建築をとつてみても、桂離宮、修学院離宮をはじめ、西本願寺や一條城など、時代を画するすばらしいものが誕生しました。

この時代に活躍した天才的な芸術家の一人に本阿弥光悦(五五八—一六三七)があります。本阿弥家は刀剣の鑑定、研磨、保存を家業とする家で、京都三長者といわれた裕福な上層町衆であった。光悦はその分家筋に生まれたが、若き日からその才能は認められて、やがて人物識見とも、京都の代表的な町衆とされた。

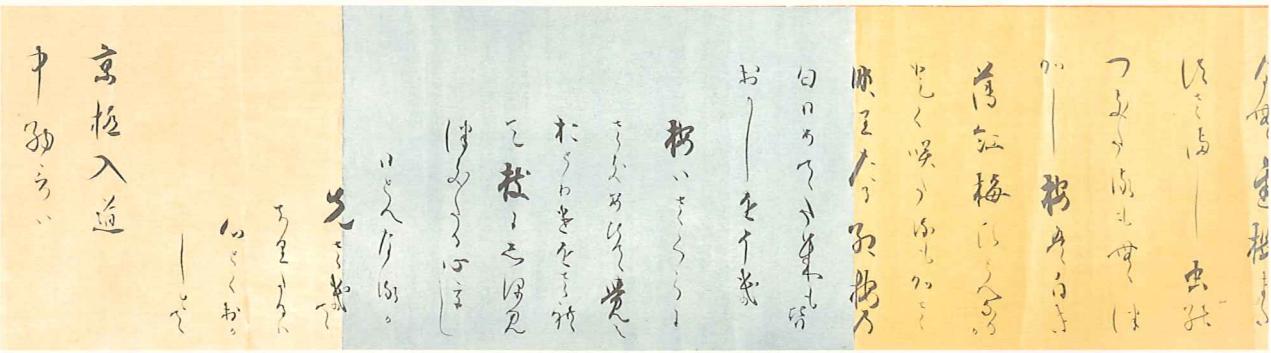
徳川家康が大阪夏の陣で豊臣氏を滅したあと、京都へ戻った。京都所司代の板倉勝重に、「近頃、光悦はどうしているか。何かしてやれないか。」と尋ねた。すると板倉は「元気にしておりますので、洛北の鷹ヶ峯の地など与えてはいかがでしょう。」と答えたという。こうして、本阿弥光悦の鷹ヶ峯芸術村ともいいうべき別天地が誕生した。

そもそも、天下人から消息を尋ねられるほどの偉大な町衆であつたこともさることながら、武家なみに土地(当然それについている百姓も)与えられるという破格の扱いをうけたところに光悦の面目躍如たるものがある。

本阿弥光悦は百芸万般に通じていた。寛永文化をヨーロッパのルネッサンスにたどえる歴史家がいるが、それになれば、光悦はレオナルド・ダ・ヴィンチに比肩する人である。絵画、漆工、彫刻、陶芸、書道、謡曲、装幀、等々、さまざまの領域で仕事をした。なかでも、ことに著名なのは国宝、重文指定品の多い漆工、陶芸、書道である。

光悦と同時代の人が「能筆なり」(書が巧みである)と光悦を評している。近衛信尹、松花堂昭乗とならんで寛永三筆(寛永時代の書の三名人)とよばれた。ある日、近衛信尹が光悦を召して、「世に能筆といわれるなかで誰が一番か。」と尋ねた。摂政関白を経験している近衛であったから、当然「それは殿下です。」という答えを期待していたのだが、なんと光悦は「まず。次に殿下。」と答えた。「まず(自分)」という自信が光悦にはあつた。

「徒然草」本阿弥光悦書



光悦の書の作品は、かなりの数が残っている。天下の能筆の作品だから、こそつて求めたのだろう。この作品は「徒然草」百三十九段「家にありたき木」の一部である。染紙をついで色替りの料紙とし、細く鋭い筆と肉太のゆつたりした筆を自由にからめた筆法は、のちのちまで光悦流として人気を博した。当時の「徒然草」ブーム(徒然草が復活し、出版や研究が寛永期に進んだ)を背景に、誰かの需めに応じて書かれたものであろう。

報告

## イベント

### 第四回 美術館周遊の旅 「滋賀・京都 美術館巡り」

平成16年6月5日(土)～6日(日)【泊一日】



表千家 北山会館にて

同ほつと胸をなでおろしました。丁寧に解説をして下さった。在座の方々、また、大変協力的でいらっしゃった参加者の皆様、本当にありがとうございました。次の企画もどうぞお楽しみに。

# HAYASHIBARA MUSEUM OF ART NEWS



作業風景

「紅花染め」  
平成16年4月17日(土)・18日(日)の2日間、企画展「能装束の世界」にちなみました第一回ワークショップ「紅花染め」を開催しました。

染織史家吉岡幸雄先生のご指導のもと、①黄水洗い  
花染めの色素抽出③染色④乾燥といった伝統的な「紅花染め」の作業工程を半日かけて行い、参加者それぞれ一枚ずつのスカーフを染め上げました。17日は「子供の部」、18日は「大人の部」として催し、両日で40名の定員は満席となりました。また、見学の方も多くいらっしゃいました。紅花の揉み出しなど、慣れない作業に苦戦しましたが、作業中に多くの質問が飛び交い、またスカーフがまつ赤になりました。特にお子さん達は感心する程、どの作業も熱心に取り組んでいました。

「紅花染め」  
を実際に「体験」

する事で、より当館所蔵の美術品への親しみとご理解を深めています。

## 第一回ワークショップ 「紅花染め」

平成16年4月17日(土)・18日(日)の2日間、企画展「能装束の世界」にちなみました第一回ワークショップ「紅花染め」を開催しました。

## 第二回ワークショップ 「銘切り」「小刀製作」

日本刀は日本が世界に誇る伝統工芸品です。林原ではメセナ活動の一環として岡山市桑野と阿哲郡哲多町に刀剣鍛錬道場を設け、備前刀の作刀活動への支援を行ってきました。岡山の誇る備前刀の伝統技術の伝承や解明、新しい時代を代表する刀剣製作にチャレンジしています。

今回のワークショップは、企画展「刀剣の美と心」にちなんで、作刀技術の一端に触れていただけるよう、「銘切り」と「小刀製作」を行います。「銘切り」では大野義光刀匠、「小刀製作」では大野刀匠のお弟子さんの高野行光刀匠にご指導していただきます。この体験を通して、郷土の育んだ文化や技術を体験していただくとともに、林原の活動へのご理解を一層深めていただければと考えています。

なお、今回のワークショップは、人数の都合上、原則として当館友の会会員の方を優先とさせていただきます。

「銘切り」(小学校高学年～中学生対象)  
大野義光刀匠による、刀剣製作行程の説明と「銘切り」の指導。  
講師 高野行光刀匠  
日 時 平成16年11月7日(日)10時～16時  
場 所 (株)林原 桑野刀剣鍛錬道場

## 後記編集

第8号の「林原美術館ニュース」如何でしたでしょうか。今回は第二回林原国際芸術祭、希望の星、特別展「五感で見る国際アート展」に関連した原稿を西村陽平先生にご寄稿いただきました。

本年度はこの後三つの企画展を予定しております。皆様のご来館を心よりお待ちしております。(M)

## イベント 報告

## イベント

## 予告

## イベント

## ●「友の会」募集のご案内●

林原美術館では、平成十七年度の美術館「友の会」の会員を募集しています。会員の方には、美術館の企画展が会員証にて無料でご観覧いただけ、ご同伴の方一名様も無料となります。また、特別展では入館料が三〇〇円引きとなります。このほかにも、館が主催する各種イベントに会員料金にてご参加いただけ、館内で販売する図録、オリジナルグッズが割引価格でご購入いただけます。さらに会員の方々には、展覧会やイベントなどの情報をいち早くお届けします。この機会に是非ご入会ください。

個人会員	一年	三、〇〇〇円（新規入会）
	二年	二、七〇〇円（入会継続）
法人会員	一年	三〇、〇〇〇円（新規入会）
	二年	二七、〇〇〇円（入会継続）
有効期限	三年	七〇、〇〇〇円

一年会員	平成17年4月1日～平成18年3月31日
三年会員	平成17年4月1日～平成20年3月31日

ご入会のお申し込みは美術館スタッフまでお尋ねください。  
(TEL) 086-2203-1733

〒700-0823 岡山市丸の内二-七-五

財団法人 林原美術館  
TEL 086-223-1733